

ずっと後に、わたしは町工場の旋盤工となり、やがてその経験をふまえて文章を書くようになる。小説やルポルタージュを書いた。エッセイ風の文章も書いたし、わずかながら芝居の台本を書いたこともある。戦争のことや、親と子のことや、男と女のこと書いたが、わたしの生涯のテーマは、おのずと「人はなぜ働くのか」に絞られた。それはわたしにとって自然の成りゆきのようなものであった。

そして、そのテーマが自分の心棒のように、体のなかに一本すつくと立ったときから、これなら書いていけるという自信のようなものが湧いてきた。

一九七〇年代の後半から八〇年代にかけて、わたしの小説が続けて**四回、直木賞や芥川賞**（なぜかわたしの場合、直木賞候補が先だった）の**候補**に推された。四回とも落ちたのだが、そのころわたしは文芸誌の編集者をはじめ多くの人から、もう**専業作家**になってもいいのではとすすめられた。しかしわたしはそうはならなかった。そのあたりの事情をわたしは「もしもいましたら、下着をつけずにズボンを書いて歩くような不安をぬぐえない」と書いた。まわりかには見えはしなくとも、自分だけはわかっている不安定さ。そのころはまだ、**書けばなんでも書けそうでありながら、体のなかに心棒が通っていなかった。**

しかしわたしは、その豊かさに溺れることなく、次のような視点でおふくろのエピソードを描くことができた。

（大森駅に人力車を置いて客待ちしていたという祖父の家も）密厳院みつごんいんというお寺の墓地の近くにあった。いまおふくろがたばこ屋を開いている位置からは、店から顔を出せば見えるところにあった。のちにおふくろが嫁入って、はじめて世帯を持ったのが入新井第一小学校の横だから、もしもいまのたばこ屋の店先にコンパスの針を立てるとすれば、半径五百メートルくらいの円のなかに、生まれ、働き、嫁ぎ、やがて死ぬまでの生涯のほとんどがすっぽりおさまってしまうだろう。わたしの父親の墓地も密厳院にある。

旋盤工の目をおふくろの目に移して、おふくろの目で見える女性史とした。だから一筆書きが可能となった。そうすることによって、大田区の産業前史が平板な資料の並列ではなく、生きいきとした姿で見えてくるのだという、貴重な体験をわたしはこの作品を通して味わうことができた。

『大森界限職人往来』の最後のエピソードとなる阿久津のじいさんの場合は、取材によるものではない。工場で使い古したグラインダーの砥石や、もうすっかり小さくなって使いようのなくなった刃物を回収して歩く人がいるのは、前から知っていた。刃物は特殊な金属だから溶かして再生するのは誰でも知っていたが、砥石は溶けるわけではないから、どうするのだろうとみんな噂し合っていた。結局は砕いて粉にして再生するらしいとわかるが、なかにはサンドペーパーの材料にするとか、ビルの階段のセメントに混ぜたら滑り止めがいいんじゃないかな

んていう珍説もあった。

わたしは大田区内のあちこちの町工場で働いたが、どこの工場でも回収にやってくるのはいつも同じ人であった。名前を知っている者はどの工場にもいなかった。それでもじいさんがいつかやってくるのを知っているから、工場の職人たちは丸い砥石の真ん中の穴に紐を通して束ねておいた。じいさんはそれを貰うと、夏ならアイスキャンデーでも食べてと、冬なら焼いもでも買ってくれと、百円か二百円を置いて、砥石を自転車に積んで帰った。その自転車のうしろに阿久津なにがしと書いてあったから、わたしが勝手に阿久津のじいさんと呼びただけである。後にわたしの本を読んで実際に調べて、じいさんの名前が阿久津ではないことを教えられたが、版を重ねた本なのにいまだに訂正してはいない。

『大森界限職人往来』に、阿久津のじいさんのことを書く予定はまったくなかった。こんどあらためて確認してみたが、大学ノートほぼ一冊分に書き込んだ創作ノートの、大まかな目次にも阿久津のじいさんは書いてない。ノートの終わりにやっと一行、阿久津のじいさん、とだけ書き足してあった。

・・・

そんなある日ひょっこりと、阿久津のじいさんがわたしの職場にやってきた。聞けばもう**八十三歳**になるという。そしてそれが、砥石回収の最後の1日で、廃業して名古屋にいる息子夫婦と暮らすことにしたという。黙って廃業したのは、自分のために砥石をとっておいてくれる工場の人たちにすまないの、長年のお礼を言いながら回収しているのだが、もう自転車で運ぶのは危ないので、赤字覚悟でトラックを雇って、近くに駐車してあるという。わたしはここではじめて、じいさんからその砥石が**1トンで1万円**にしかならなかったから、**競争相手も現われずに何十年もそれで暮らせた**のだったことを聞いた。